

教育実習の課題と学校インターンシップのニーズ — 小中学校・教育委員会へのインタビュー結果の分析から —

山本 礼二¹⁾、枝元 香菜子²⁾、渡邊 はるか¹⁾、藤谷 哲¹⁾、峯村 恒平³⁾

(¹⁾人間学部児童教育学科 ²⁾金沢学院大学文学部教育学科 ³⁾教育研究所)

Challenges for Determining the Curriculum Contents of Experience Activities at School and Teaching Practice: An Interview Research on School Administrators

Reiji YAMAMOTO¹⁾, Kanako EDAMOTO²⁾
Haruka WATANABE¹⁾, Satoru FUJITANI¹⁾, Kohei MINEMURA³⁾

(¹⁾ Department of Childhood Education and Welfare, Faculty of Human Sciences

²⁾ Department of Education, Faculty of Letters, Kanazawa Gakuin University

³⁾ Research Institute for Education)

本論は、教職課程における「教育実習」の現状について課題を明らかにしつつ、新たに導入されたいわゆる「学校インターンシップ」に何が求められているか、ということについて、現職の教員、学校管理職、指導主事を対象にインタビューを行った結果を分析し報告したものである。インタビュー内容はまず、「教育実習」と「学校インターンシップ」について語られた内容をそれぞれ1つのデータとし、クラスター分析を通じて出現単語のまとまりの傾向を分析した。そして、見出された単語群について、実際にインタビューのプロトコルを見ながら、どのようなことが課題として挙げられているか、抽出・検討した。その結果、社会人としてのマナーや態度に関わる課題が教育実習については語られており、また、早期から学校現場に関わることや保護者対応に関するニーズが学校インターンシップについては見出された。これらを踏まえ、今後「学校インターンシップ」を含めてどのような教員を育てていくかについて示唆的展望を述べた。

キーワード：教育実習、学校インターンシップ、インタビュー、教職課程、課題、ニーズ

はじめに

本論は、教職課程における「教育実習」の現状について課題を明らかにしつつ、新たに教職課程に導入されたいわゆる「学校インターンシップ」に何が求められているか、ということについて、現職の教員、指導主事、学校管理職にインタビューした結果を踏まえ、考察を試みたものである。

2019年4月1日に施行された改正教育職員免許

法及び施行規則により、いわゆる「学校インターンシップ」が教職に関する科目として導入された。この導入の背景は、中央教育審議会答申などを辿って整理してみると、まず2012年の中央教育審議会の答申「教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（中央教育審議会、2012）において、教職課程のあり方について改革を提言しており、その中では、「学校ボランティアや学校支援地域本部、児童館での活動など、教育実習以外に

も一定期間学校現場等での体験機会の充実を図る」といった内容が明記されており、教育実習以外に学校や子ども等に関わる機会の充実を提言していた。

2013年に教育再生実行会議で発表された「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」（教育再生実行会議，2013）では、「初等中等教育を担う教員の質の向上のため、…、実践型カリキュラムへの転換、…、また学生の学校現場でのボランティア活動を推進」といったことが明記され、質の向上のために教員養成段階においても実践的な体験をより重視するよう示されてきたところでもあった。そして、今回の教育職員免許法改正の前提となった、中央教育審議会答申「これからの学校を担う教員の資質能力の向上について」（中央教育審議会，2015）において、先駆的に導入されている事例を参考にしながら、学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組みを「既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効」とした上で、その導入について提言してきたところであった。

これらを俯瞰して見てみると、教育実習だけでは無い、学校ボランティア等学校現場と関わる活動を増やすことが、議論・答申されてきたことがわかる。

そして、先にあげた、2015年の答申では、学校インターンシップの実施にあたっては、「既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るとともに、その円滑かつ確実な実施に向けて、受入れ校の確保や実施内容の検討等のための教育委員会や学校と大学との連携体制の構築、大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施、学生側と受入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供の実施など、環境整備について今後十分に検討することが必要である」（中央教育審議会，2015，p.33）としている。これは本学においても同様に重要な視点であるが、これまでにあまり検討されてこなかった。

そこで、本論では、この検討の必要を受け、以下2点の目的で研究を行うこととした。まず一点目が、「既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図る」ために、教育実習にどのような課題があり、どのような役割を学校インターンシップに担わせ得るか、ということの示唆を得ることである。そして第二点

目が「学生側と受入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供」のために、そもそも学校インターンシップにどのようなニーズやメリットを見出しうるか、一点目の目的で明らかになった教育実習にどのような課題があるかということもふまえて、学校インターンシップのニーズやメリットについて若干の検討を行うことである。

1. 研究の目的

本研究は、上述したとおり、まず教育実習にどのような課題があるかを明らかにし、それも踏まえて「学校インターンシップ」が既存の教育実習との間でどのような役割を担い、またそもそも、学校インターンシップにどのようなニーズやメリットを見出しうるかについて明らかにすることが目的である。

これを明らかにするために、本研究では、答申であげられた「学生側」と「受入れ校側」のうち、「受入れ校側」に着目した研究を行うこととした。具体的には、学校教員、あるいは教育行政関係者を対象としたインタビュー調査とし、この分析及び検討によってこれを明らかにすることを試みた。

2. 本研究の方法

(1) 調査対象

教育実習に関する課題を明らかにする、という目的に従うと、「受入れ校側」の調査対象者は、実際に教育実習生を受入れ、指導等をしたことがある現職教員や、実際に監督する管理職にインタビューすることが望ましいと考えた。そこで、複数人の教育実習生を経験している、あるいは、時系列で相対化しつつ「昨今の教育実習生」について調査し得る、ある程度経験年数の長い現職教員ないし、管理職を調査対象とすることとした。また教育委員会指導主事は、教育行政の立場から教育実習生の受入れ調整をしたり、各学校との連絡調整の窓口となったり、そもそも指導主事は学校での経験年数もあることから、教育実習や教育実習生に関する課題を調査するのに適当であると考えられたため、教育委員会指導主事も調査対象とすることとした。

また、対象地域を広くし過ぎることで、地域ごとの課題が収集され過ぎ、課題が不明確にならないよ

表1 対象内訳

インタビュー先：10 件		対象者：12 名
【教育委員会】		性別
A 市教育委員会	課長（主席指導主事）、 主幹（指導主事）	男 男
B 区教育委員会	指導室長	男
C 市教育委員会	指導主事	男
【小中学校】		
A 市立小学校	教頭	女
A 市立中学校	校長 主幹教諭	男 男
B 区立中学校	校長	男
D 市立小学校	校長	女
D 市立中学校	校長	男
E 区立小学校	校長（幼稚園長）	男
国立大学附属小学校	副校長	男

うに、対象は1都3県とした。

後述する倫理的配慮に沿った依頼手続きの結果、調査対象となったのは、教育委員会の指導主事や、小学校、中学校、高等学校等の20年以上の勤務歴があり、特に管理的立場にある教員等、計12名となった。インタビュー先の内訳は、表1の通り教育委員会3件、小学校4件、中学校3件であった。

なお、年齢（年代）については、情報がないことによって著しく調査対象者の背景が理解できず、インタビュー内容の信憑性に影響が出るなど、本研究の根幹に関わる瑕疵を想定できなかったため、倫理的配慮の観点から対象者に聴取していない。しかし、上述のとおり経験年数は相当に長い、管理職経験者がその主な対象である。

(2) 調査内容

2018年12月～2019年2月にかけて半構造化面接調査法によるインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の内容は、表2に示すとおりであり、大きく分けて、①教育実習に関するもの、②教員キャリアとの接続を意図した、特に大学でもう少し学修させたいこと等、③学校インターンシップに関するニーズ等を含むこと等であった。事前に調査者に示し、同意を得た上で、インタビューを行った。インタビューは概ねどの対象者も1時間～1時間30分

程度で実施した。

(3) 分析方法

インタビューで語られた内容は、当然それぞれの対象者によって、具体的な事例の話もあれば、それを踏まえた一般的な話もあった。具体的な事例の話は、対象者によってまちまちだが、一般的な話については、半構造化インタビューであり、同一のテーマについてインタビューしていることから、一定の傾向が見られるのではないかと予想した。

そこで、本研究では、全インタビューデータを統

表2 インタビュー調査の内容

【教育実習の課題と教育実習との接続を意図して】	
①教育実習が始まった直後に、学生が不慣れであること、経験不足であること等で発生する課題は何か	
②教育実習前に学校現場に関して知っておいてほしいことや、経験しておいてほしいことは何か	
③教育実習では経験させられないが、教育実習以外で、学校現場に関して知っておいてほしいことや経験しておいてほしいことは何か	
④学校現場に限らず、教員として着任する前に、知っておいてほしいことや、経験しておいてほしいことは何か	
⑤教員の適性は教育実習生のどのような経験・体験・行動から感じることは何か	
【教員キャリアとの接続を意図して】	
①初任者教員が着任後、比較的起こしやすい問題、課題にはどのようなものがあるか	
②初任者教員になる前、大学等において予めもっと学修しておいてほしいと感じるものは何か	
③初任者教員になる前、大学等において予めもっと経験しておいてほしいと感じるものは何か	
④初任者教員が職場に定着する上で、重要な要素はどのようなものが何か	
⑤教員の適性は初任者教員のどのような経験・体験・行動から感じることは何か	
【学校インターンシップに関して】	
①法改正で学校インターンシップが始まるが、これについて取り入れてほしい内容は何か	
②学校インターンシップに「入れないでほしい」内容は何か	
③学校インターンシップで教育実習前に経験してほしい内容は何か	
④学校インターンシップで着任前だからこそ経験してほしい内容は何か	
⑤学校インターンシップの実施にあたって、より大学と連携をしたり、協議していきたい内容は何か	

合し、語られていることの傾向を分析することを試みた。ただし、すべて統合して分析をすると、話題が混在しすぎて傾向が見づらくなりかねないことから、表2で示した、半構造化インタビューの大きな括りである「教育実習」、「教員キャリア」、「学校インターンシップ」の3つ「統合データ」を作成し、分析を進めることとした。

この「統合データ」の作成にあたっては、3名の研究者がインタビューを文字起こししたデータから類別・分類し、相違があったプロトコル部分については、3名の研究者にインタビューアーも混ぜ、そのプロトコルの文脈等も踏まえて適宜分類した。

次に、「ああ」、「えー」、「うーん」など無意味な語は除外し、「子ども」と「子どもたち」等、同意味として捉えられるものは「子ども」に統合するなど、データのクリーニングを行った。

その上で、各統合データを、KH Coder (3.00f)を用いて分析した。KH Coderは林・駒沢 (1982)が提唱した数量化Ⅲ類の手法を実際に計算機で実現したものであり、樋口 (2014)で報告されているソフトウェアである。投入した文章データを、単語ごとに区切り、指定したまとまり内(具体的には、文、段落、インタビュー単位等)でどの単語とどの単語が同時に出現しやすいかを分析することができる。

今回は特に、どの単語とどの単語が同じ文脈で出現しやすいのか、そのまとまりはどのような概念か、といったことの傾向がみたいため、クラスター分析を行うこととした。クラスター分析では、スクリープロットをもとに、適切と思われるクラスター数にした上で、出現単語やそのまとまりの傾向を探った。

その後、研究者5名でその各クラスターに出てくる単語と実際のインタビューの内容との照合作業を行い、課題について具体的に整理した。

(4) 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、「目白大学における人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会」による承認を得て行った(承認番号18-027)。具体的な倫理的な配慮の内容としては、調査への協力は、研究対象者の自由意志が担保されていること、守秘義務に反しない範囲での回答で構わないこと、答えたくない質問、答えられない質問は答えなくて

良いこと、質問を聞いてから回答を拒否しても良いこと、回答してから回答を取り消すことも出来ること等の配慮を保証し、調査内容の説明の際に、これらの内容も説明して同意書による同意を得た。

3. 結果

本研究では、目的に従い、統合データのうち、「教育実習」について語られたものと、「学校インターンシップ」について語られたものについて、分析、検討を行う。

(1) 教育実習について

まずは、教育実習について語られたインタビューのクラスター分析結果を述べる。クラスター分析の方法はWard法とし、スクリープロット等を参考にクラスターの数を決めることとした。なお、KH Coderは分析対象の単語数をいくらでも増やすことができるが、多すぎると見づらくなってしまう。デフォルトの描画設定が60語になっていることから、本論においても描画対象単語数が60語にもっとも近づくよう検討したところ、統合データ内での最小出現回数を16回としたとき、対象単語数が65語で、60語に最も近かった。結果、この65語について分析を行うことにした。

その結果、7つのクラスターに分類された。それぞれを構成する単語群を、研究者5名でクラスターごとに検討した結果、各クラスターを、①社会性、②ボランティア、③インターンシップ、④指導、⑤学級、⑥コミュニケーション、⑦その他(教育実習全般に係る内容)、と名付けた。

そこから各クラスターに出てくる単語と実際のインタビューの内容とを照らし合わせ、概ね6割以上が同一の意味合いについて語られている内容を含むクラスターを判定し、そこから実際にどのようなことが教育実習の課題として挙げられているか検討した。その結果、「社会性」、「ボランティア」、「学級」、「コミュニケーション」に関する項目が挙げられた。「社会性」については、「社会人として」や「社会常識」、「言葉遣い」、「当然」などという表現が多く検出された。「ボランティア」については、そのものの単語が多くみられ、「ボランティア」として学校に入ることが多く語られていた。「学級」については、

表3 教育実習に関する課題として語られた内容

<p>【「社会性」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • <u>社会人</u>として当たり前にはできることは教員になっても当たり前なので、だからその、<u>社会人</u>としてっていう意味で言うと、教員とか、その普通の企業とかって全然こう、隔たりはないと思うんですね。(中略) やっぱりこう<u>社会人</u>としての当たり前とか、<u>社会人</u>としてこう、できてほしいことっていうことは現場に来る前にやっぱり学んでほしいなっていうところはすごく強く感じます。 • 一般の社会人でも同じじゃないですか。要は、駄目な<u>社会人</u>がいい教員になれるわけじゃないので。 • 最低限の<u>社会常識</u>ですね、まずは。 • あともう一つは<u>言葉遣い</u>。 • ちょっと<u>言葉</u>選ばずに言ってしまうと、<u>言葉遣い</u>が悪いよと…
<p>【「ボランティア」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 疑似社会経験っていいですか、(中略) <u>ボランティア</u>とかそういうところというのはすごく重要だと思いますね。 • 子どもとの関わり方一つでも、学校に<u>ボランティア</u>でもいいのでちょっと関わってもらってから来ると、少し関わり方とか分かるかなっていう感じはします。 • 事前の社会体験っていうか、<u>ボランティア</u>、特に学校現場での<u>ボランティア</u>経験っていうのは、実習上、大変強いかなと思いますね。 • 学校現場に早くから、もし教職を目指すならば、<u>ボランティア</u>で入ってきてくれたほうが、私は損にはならないと思いますね。
<p>【「学級」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 実習生が崩壊させるってことは、まずないから。<u>学級担任</u>。なるべくしっかりした<u>学級担任</u>のところへ入ってもらうんで。そこで、力がない子の一部には、錯覚する子がいて、自分がやれてると思うんですね。実は、指導教諭がしっかり<u>学級経営</u>をしてるからなんだけれど。 • 現場に来てから一番戸惑うのは多分、(中略) その<u>学級</u>で起こるいろんなことを、まずその、誰に相談していいとか、どこまでのことを相談していいのかっていう…
<p>【「コミュニケーション」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • <u>コミュニケーション</u>能力がやっぱり厳しい方は、別の職業いかれたほうがいいんじゃないですかって思います。 • 病休？なりやすい。<u>コミュニケーション</u>取れない子は。 • <u>コミュニケーション</u>とも関わっているんですが、どうしても<u>人</u>と、子どもともそうですし、保護者とも先生方とも、なかなか<u>コミュニケーション</u>がうまくいかないっていうのが要因で、うまくいかない…。 • 教職に就こうと思う人間は、やっぱり積極的にね、<u>コミュニケーション</u>取って、働き掛けをしていくっていうことが、とっても大事なかなと思います。

表4 学校インターンシップに関する課題として語られた内容

<p>【「関わる／聞くこと」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • <u>人と関わる</u>ことを、やってほしいなと思いますね。 • 子どもとの<u>関わり</u>とかそういうところはすごく大事なんですね。子どもに<u>関わる</u>こと、休み時間に一緒に遊ぶ、遊びの内容を、小学校あたりは、あらかじめそんな勉強して… • やっぱり子どもに<u>関わる</u>ものはむしろ、あの、どんどんやっていただいたほうが、いいかなと思うので… • 保護者対応のときに、対応じゃなくても保護者と話してるときに担任の先生の横にいて話を<u>聞く</u>とか、そういうことやってほしいな。 • 大きいのは本当に今言った保護者の話を<u>聞く</u>、子どもの話を<u>聞く</u>っていう、あの一、普段大学で味わえないような生の声、リアルな声を<u>聞く</u>っていうところを、ぜひ取り入れていってもらいたい。
<p>【「体験する」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • インターンシップとのときはもう、学校をとにかく、見てやろうとか、<u>体験</u>しようっていう、それだけで十分… • 自分もそこへ行って<u>体験</u>しようっていう… • なんか多様な、いろんな<u>体験</u>なり経験なり、するべきだと思うし。 • 1日ってどうやって学校って動いているんだろうかっていうのを、まあ<u>体験</u>するなり…
<p>【「保護者対応」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • <u>保護者対応</u>っていうのはなかなか難しいんじゃないですか。だから、そういう意味で<u>保護者対応</u>っていうのは実際に現場に来て覚えてもらえばいいことだと思うんですね。 • 電話対応、<u>保護者対応</u>のときに、対応じゃなくても<u>保護者</u>と話してるときに担任の先生の横にいて話を聞く。
<p>【「経験する」クラスター内の単語とその内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • この段階からいろんなことを<u>経験</u>して、コミュニケーション取って、いろんな人を知って視野を広げるっていうことがこれからの<u>教職経験</u>には絶対生きてくと思う。 • 先生方とのコミュニケーションですよ。たくさん<u>経験</u>、たくさん先生方と話して、で、どんな人たちがいるのかな、先生方ってどういうことを思ってるのかなっていうのを実感してもらいたいです。 • 実際に学校行って、あ、確かに食管が別になってるだとか、なんかシールが貼られてるだとか、見ることによってそこで<u>経験</u>できて… • いろんなことをこう、<u>経験</u>したり感じたりすることもすごく大事だと思うんですね。 • あとは何でも<u>経験</u>してって思います。 • <u>経験</u>として、<u>経験</u>なんだと思っていろいろやってみるといいと思いますよ。

「学級」そのものの単語に加えて、「学級担任」、「学級経営」の視点から語られるものも多く見られた。最後に「コミュニケーション」については、「人」、「人間関係」の視点から「コミュニケーション」の取り方、重要性について多く語られていた。各項目について、語られた内容の一例を表3に示す。

(2) 学校インターンシップについて

次に、学校インターンシップについて語られたインタビューのクラスター分析結果を述べる。(1)と同様の手順で、最小出現回数を14回としたとき、対象が61語で、もっとも60語に近かった。この61語で分析を行った結果、5つのクラスターに分類された。それぞれを構成する単語から、①その他、②関わる／聞くこと、③体験すること、④保護者対応、⑤経験すること、に関するクラスターと名付けた。これらをもとに実際のインタビュー内容との照合作業を行った結果、「その他」のクラスターを除く「関わる／聞くこと」、「体験すること」、「保護者対応」、「経験すること」の4項目が学校インターンシップのニーズとして挙げられていると判断することができた。各項目について、語られた内容の一例を表4に示す。

4. 考 察

本研究は、まず教育実習にどのような課題があるかを明らかにし、それも踏まえつつ「学校インターンシップ」が既存の教育実習との間でどのような役割を担い、またそもそも、学校インターンシップにどのようなニーズやメリットを見出しうるかについて検討することを目的に、現職教員、管理職や指導主事への半構造化インタビューについて、数量化III類を用いて分類し、抽出された単語からインタビュー内容に戻って、「語られていた傾向」という面から検討をしてきた。

検討の結果、教育実習に関するインタビュー内容の傾向としては「社会性」、「ボランティア」、「学級」、「コミュニケーション」の4つのクラスターについて、特に表3で示したような具体的な内容が明らかになった。また、学校インターンシップに関するインタビュー内容の傾向としては、「関わる／知ること」、「体験すること」、「保護者対応」、「経験する

こと」の4つのクラスターについて、表4のとおり、ニーズが抽出された。

これらをまとめると、教育実習および学校インターンシップにおける課題は下記の2つ、図1のように集約することができるだろう。

①社会人としての態度やマナー、行動

- 教育実習生としても一教員としても、社会人としても態度やマナーを身に付けておくこと。
- 子どもとも大人ともしっかりコミュニケーションがとれること。

②学校現場への関わり、体験、経験

- 教育実習においても、学校インターンシップにおいても学校現場に積極的に関わり、体験すること、経験すること。
- 学校インターンシップでは、教育実習では対応できない保護者対応について学ぶこと。

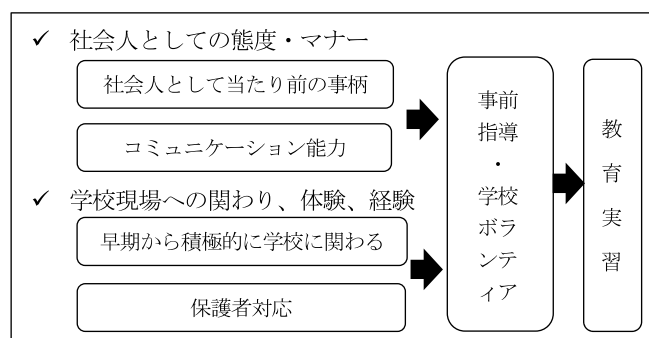


図1 分析よりみえた主な課題・ニーズ

おわりに

今回はインタビューの内容についてKH Coderを用いた量的分析、その後の照合作業を行うこと通して、語られたことに対する共通性の傾向を見出すことができた。その結果として、本論では図1のように課題とニーズをまとめた。

研究面での今後の課題としては、今回はインタビュー全体の傾向という検討にとどまっているが、改めてそれぞれのインタビューについて聞いた内容を整理しつつ、精緻な課題の抽出を行う必要はあるだろう。実践的な側面では、今回明らかになった課題や、ニーズを踏まえ、学校インターンシップといった新しい科目の内容を中心に、教職課程全体の内容を検討していくことが必要だと思われる。

付 記

本研究は、JSPS 科研費（課題番号：18K02867）の助成を受けたものです。

引用文献

教育再生実行会議（2013）「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」．
中央教育審議会（2012）「教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」．
中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて（答

申）」．

林知己夫・駒澤勉（1982）『数量化理論とデータ処理』朝倉書店．

樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析 — 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版．

参照法令等（2019 年 10 月時点）

- 教育職員免許法
- 教育職員免許法施行規則
- 教職課程認定基準

（受付日：2019年10月31日、受理日2020年1月21日）